

戦いは終わっていない＝元村有希子

12/28 毎日新聞

コロナの報道が減ったのはなぜ？ 政府の指示ですか？」

先日、登壇したシンポジウムで聴衆から質問を受けた。確かに新型コロナウイルス感染症が感染症法上の「5類」に移行した今年5月以降、報道は激減した。

法的な位置付けの変更に伴い、行政機関の構え方が変わったことなどを挙げて「取材機会そのものが減っている」と答えたが、今も心にひっかかっている。

コロナ禍は丸4年になる。パンデミック（世界的大流行）は続いている。しかし社会は忘れたように日常に戻りつつある。報道機関も似たり寄ったりかもしれない。

パンデミックへの対処を戦争の比喩で語ることはやめよう——と、作家の瀬名秀明さんが対談で語っている（「知の統合は可能か」時事通信社）。

ウイルスを敵に見立てた「戦争」は長期化した。めまぐるしく変異を繰り返す相手に、人類は右往左往した。

「欲しがりません勝つまでは」とばかりに耐えしのぶ人々は、ルール違反を激しく攻撃した。社会には格差と分断が生まれた。ワクチン接種やマスクの着用をめぐる対立が象徴的だ。

やがて人々は戦うことに疲れ、「自分さえ元気なら」という心境が頭をもたげる。だが、生半可な姿勢ではパンデミックを克服できない。瀬名さんの発言は、そんな危機感に基づいている。

同意する。その上で私は、日本の戦いを振り返り、課題を検証すべきだと考えている。

勝つためには情報と物資が不可欠だが、最前線は悲惨だった。感染状況の集約はファクスで行われ、データの活用も不十分だった。検査キットや防護服、マスクが早々に底を突き、供給網を海外に頼る弱点が露呈した。

司令官はいたが、作戦は場当たりの的でたびたび迷走した。科学的な助言は軽んじられた。科学先進国にもかかわらず、国産の薬やワクチン開発は目を覆うような負け戦に終わった。

不思議なのは、こんなていたらしくても、日本の死者数が欧米諸国を大きく下回ったことだ。結果に安んじることなく背景を分析する必要があるだろう。

9月には内閣感染症危機管理統括庁が発足した。次の感染症危機には、省庁の壁を超えた司令塔となることを目指している。

もちろん器を作って終わりではなく、平時からの備えがものをいう。現状を検証し、反省を次に生かしてほしい。今が踏ん張り時である。

中国、コロナ新変異株「JN・1」増加傾向 米国などで急速に拡大

中国保健当局は28日、新型コロナウイルスの新変異株「JN・1」の感染例が中国で出ており、増加傾向にあると発表した。JN・1は米国やインドなど各国で急速に感染が拡大し、世界保健機関（WHO）が先週「注目すべき変異株（VOI）」に指定した。現行のワクチンで予防効果が得られるという。

中国当局は年末年始や2024年2月の春節（旧正月）の大型連休で人の移動が多くなり、コロナ感染の増加が予想されるとして、マスク着用や手洗いなどの感染対策を励行するよう呼びかけた。

中国疾病予防コントロールセンターの担当者は28日の記者会見で、JN・1は海外で感

染が急速に広がり、流行の中心となっていると指摘。中国のコロナ感染状況は「低いレベルだ」としながらも、JN・1が増加しており、国内の主流となる可能性があると説明した。

JN・1はオミクロン株派生型の系統が変異したウイルスで、感染力が強いとされる。

中国では今年冬、子どもを中心に肺炎などの呼吸器疾患が流行している。(共同)